

ダイバーショナルセラピーの紹介と実践者への調査

～チームアプローチの有効性の視点から～

An introduction of Diversional Therapy and Investigation to the Practitioner -From a Viewpoint of the Effectiveness of the Team Approach-

岩本 義浩¹

オーストラリアでは、社会福祉施設においてダイバーショナルセラピーを導入することが増えつつある。そのダイバーショナルセラピーについて、ダイバーショナルセラピーワーカーへのインタビューから、ダイバーショナルセラピーの活動の一つであるソナスセッションを日本の高齢者施設で導入することの有効性について調査した。

ダイバーショナルセラピーの特徴は、まず利用者が楽しむということ、さらに関わるスタッフも共に楽しむというスタイルであった。これは、与える側と受ける側の展開という日本の福祉思想とは別の角度からのアプローチである。単なる楽しみやレジャーとは異なり、ソナスセッションはプログラム内容としても完全な活動であった。Assessment(事前調査) Planning (調査に基づく計画・設計) Implementation (計画に基づく実施) Evaluation (事後評価) へとプロセスを踏み内容の検証を行っていた。さらに、ソナスセッションを行うことを通じて、職員間の協調性や仕事への有効に活用できることが示唆された。

キーワード：DT、DTワーカー、ソナスセッション、チームアプローチ

1. はじめに

オーストラリアでは、「老いることは楽しむことであって、耐えることではない」という言葉(1998年「高齢化するオーストラリアの国家戦略」の主意書より)に代表されるように、すべての人が主体的に生きることを楽しむという前向きな思想がある。ダイバーショナルセラピー(以下DTとする)もその考え方が反映されたものであり、オーストラリアの高齢者施設、障害者施設、病院、刑務所でも導入されている。

一方日本では従来、社会福祉施設で与える側と受ける側とに分けて考える傾向にあり、相互主体として成立していない。

日本でもオーストラリアと同じ理念で活動している特定非営利活動法人・日本ダイバーショナルセラピー協会(The Diversional Therapy Association of Japan(以下DTAJとする))がある。彼らが行ってい

る活動については、まだ広く知られていないのが現状である。そこで、日本でDTを導入しようとする施設で実際に展開しているプログラムについて調査することにより、一般的な日中活動への応用について検討していきたい。

2. ダイバーショナルセラピーについて

2-1 ダイバーショナルセラピーとは

オーストラリアで生まれたDTは、レクリエーションやライフスタイルへのアプローチを通して心身の感覚的能力に働きかけるものである。利用者自身の持つ可能性を見つけ、自らの存在感と自信を取り戻せる可能性が得られる。DTは、自らの存在感と自信を取り戻せるように支援し、その人が楽しさや幸福感を感じるように気持ちや行動の転換をはかることを目的としている。

芹澤(2004)は、「具体的には社会福祉施設・デイ

1 植草学園短期大学

サービス・在宅などで利用者の生活歴や趣味などを把握し、それに沿ってレクリエーションやセラピーなどを計画して実施する。そして、本人の満足度や変化を記録して評価し、さらなるケアを展開している」と述べている。

つまりは「一人の人間がより楽しく意味のある生活を送るために必要なもの（こと）を、計画的・意図的に生み出していくための多様な実践」である。

その根拠には「その人にとって意味のあるレジャーやレクリエーションを体験することで、その人の能力にかかわらずすべての人に与えられる権利である（オーストラリアダイバーショナルセラピー協会：The Diversional Therapy Association of Australia / 2009年より Diversional Therapy Australia）（以下 DTA とする）」という考え方があ

2.2 DTの歴史の変遷

オーストラリア連邦政府の Aged Care 省（現在：Health & Ageing 省）の初代大臣 ブロンウィン・ビショップは 芹澤 (1999) のインタビューに答えて「老いることは楽しむことであって、耐えることではない」と述べている。この言葉から、高齢者が加齢と共に心身が衰えるという捉え方よりむしろ人として生きる楽しみもあるととらえている。それが DT としての形になった。

DTA によると DT は、40 数年前にオーストラリアの傷痍軍人へのケアに当たった赤十字社のレクリエーション担当者やリハビリテーションのスタッフらにより始まったとされている。その後 1976 年にはシドニーに DT 協会が設立された。1980 年代には、オーストラリア全州に広まった。

社会的背景をみると、1985 年に連邦政府により高齢者政策の改革が行われ、「高齢者施設入居者の権利と責任の憲章」が策定されている。

憲章には 18 項目の「権利」と 4 項目の「責任・義務」が掲げられている。その中で言及される「家庭的な環境」「個人の好みや選択の尊重」「友人や地域との自由な交流、活動」、そして「リスクを受容する

権利」などは DT の実践のよりどころともなっている。

3. DTの定義と活動プログラムの紹介

芹澤 (2004) は、「ダイバーショナルセラピーとは、個々人の独自性と個性を尊重し、よりよく生きることをめざし実践する機会を持てるようサポートし、自分らしく生きたいという要求に応えるため、2004 年 3 月 13 日、DTAJ では『DT の定義』の策定を基に『事前調査→計画→実施→事後評価』のプロセスに基づいて、個々人の“楽しみ”からライフスタイル全般まで、そのプログラムや環境をアレンジし提供する全人的ケアの思想と手法である」と述べている。

DT の実施に当たっては、計画時に設定したゴールを常に意識し、明確な目的意識を持った介入が行われる。

DT の実施で留意されることの一つに「感性の刺激」がある。これは、コミュニケーションによる脳への刺激によって本来の感情や社会性を取り戻そうとするものである。特徴的な DT プログラムには、①ドールセラピー ②センサリールーム ③SONAS セッション（以下ソナスセッションとする）などもある。この代表的な DT プログラムは、五感への刺激等に配慮した内容で対象者へアプローチを行うものである。以下簡単に紹介する。

1) ドールセラピーは、触覚や視覚への刺激により、赤ちゃん人形によって呼び覚まされた「世話する意欲」や「愛情の記憶」が能動的な行動や感情を生み出し、他の人との会話や笑顔を生み出していく。乳児の実物に近づけた人形を使い高齢者の若い日々を回想して頂き、自分がとても輝いていた時代から生活へのアプローチを行う。

2) センサリールームは、スヌーズレン¹⁾を応用しお香やアロマオイル等を使用して嗅覚へ心地よさを与え、ヒーリング曲を静かに流し聴覚に安らぎを与える。さらに、淡い色の電飾やミラーボールを使用して視覚への働きかけ、柔らかいクッションを用いて、より触覚によるリラクゼーション効果が出る場を設定することで感情への刺激を行っている。

¹⁾ スヌーズレンとは、「オランダのエーデという町にある知識障害を持つ人々が住む施設、ハルテンベルグセンターで生まれた活動で（中略）、スヌーズレンの語源は 2 つのオランダ語、スニッフレン〈クンクンとあたりを探索する〉、ドゥースレン〈ウトウトくつろぐ〉の造語であり、「自由に探索したり、くつろぐ様子を表しています」（日本スヌーズレン協会 HP「スヌーズレンとは」より抜粋）

3) ソナスセッションは、音楽と会話をベースに回想、運動、遊び、五感への刺激、笑いなどの要素を、設定したテーマにそって40分程度のセッションに組み込むものである。一人一人に焦点を当てながらコミュニケーションし、クライアントは楽しさ、心身の活性、能動的感情や行動、自己表現などを経験する。

4. ソナスセッションの目的とDTワーカーの資格

ソナスセッションは、アイルランドからオーストラリアに伝わり、芹澤らによりDTAJで行われるようになった(資料1)。DTプログラムの中でソナスセッションは、高齢者施設での日中活動として導入

することが可能である。そこで、ソナスセッションについて、さらに詳しく述べる。ここでは、日本で実際に行われているものを取り上げる。

DTプログラムは、DT協会認定のDTワーカーを中心に計画、実施される。10名前後の利用者で、施設の共有スペース等で行う。参加メンバーに限らず、興味や関心のある利用者が自発的に参加することも可能である。メンバー以外の途中参加や中座はそのまま受け入れるスタイルで行われる。

メンバーについては、DTアセスメントシート(表1)を使用し家族や利用者から話を聞き記入をする。

DTワーカーは、全国基準(DTAANC)²⁾の承認を得た日本の独自の資格である。

新野(2010)は、オーストラリアではDTを行う者

表1

DTアセスメントシート			
入居(利用)者指名【		】年令【	】(男・女)
生活エリア【		】	記入者
お生まれ	西暦:	年/大正・昭和	年/干支 月 日
生まれ故郷		どんなところ?	都会() 海辺() 山や川()
子供時代の印象や思い出 (好む昔の話など)			
長く住んだところ、印象に残っている人や場所			
大人になってからの印象や、 主な仕事歴or家業			
得意なこと	P(過去)		
好きな趣味 興味のある こと	C(現在)		
大切なもの等			
人間関係 ()一人である方が好き ()グループである方が好き ()どちらも好き ()どれも好まない ◎友人、気の合う人()			
願望:何がしたい?行きたいところ、会いたい人は?			
現在の状況	身体的		
	認知的		
	感情的		
	社会的 地域との関係等		
家族関係	夫(健在 / 死別 / 離婚等) 子ども(人/子どもを亡くした経験が < ある ・ ない > / 孫 ・ ひ孫 (人)		
	家庭訪問(頻度: / 最もよく訪問する人:)		
入所または介入の動機		()本人の希望 ()家族のすすめで了解 ()不本意で拒否的 ()職員として把握していない	
多く見られる表情や気づき 特筆すべきこと		明るい笑顔・おたやか・受容的・攻撃的・拒否的・不満・怒り・悲しみ・あきらめ・無表情 ☆特筆すべきこと	

日本DT協会/芹澤

²⁾ DATAANC(Diversional Therapy Association of Australia National Council)National course Standards."DTAANC,2006(v.June 2006)

を、ダイバーショナルセラピスト養成教育課程のDTAANCによって以下の3段階のレベルに分けて認定している。

1級会員＝ダイバーショナルセラピストとして認定され、DTを行うことができる。2級会員＝訓練生として、ダイバーショナルセラピストのアシスタント、またはレクリエーションアクティビティを担当者することができる。3級会員＝全国の協会の養成課程や大学等の認定課程に入学できる。

また、1級課程では240時間以上、2級課程では120時間以上の現場実習を義務付けている。

日本DT協会では、DTAANCのカリキュラムの内容を踏まえ、日本の実情に沿った形で養成講座を設定している。48時間の講習を4か月間かけて行う。関東地方と関西地方の2か所で講座を実施している。よって日本では、ダイバーショナルセラピストではなく、DTワーカーという名称を用いてDTAANCの承認を得て各個人に認定書が授与されている。

5. ダイバーショナルセラピストの資質と展開方法

芹澤(2004)は、「ダイバーショナルセラピストは理学療法士、作業療法士、言語療法士、臨床心理士等の専門職や医療・介護スタッフと連携して働く必要がある。また、利用者の多様な希望やプログラムを満たすために適切なボランティアを募集し協力を得なければならない。地域とのコミュニケーションも欠かせないこととなる。このように様々な領域の知識と、それらの専門家及び利用者を取りまくすべての人たちと連携する力が求められている」と述べている。

日本におけるDTワーカーも同様である。このことは、DTワーカー養成講座には、福祉施設、病院職員や作業療法士、理学療法士などの専門職の参加があることから伺える。DTワーカーに必要な資質は、利用者を取り巻く様々な知識を得た上で、地域の一員としての“高齢者や障害者の「楽しむ権利」を支援する実践者であること”といえるだろう。DTワーカーは、今のところ認知度は低いが、これから広く理解されていく分野であり、創作的活動として介護福祉分野にとどまらず、リハビリテーション活動或は、学校教育的活動でも展開が可能であるといえる。

芹澤(2004)によるとDTには介護の分野と同様に

次の4つのプロセスがある。

1) Assessment(事前調査)

利用者が一人ひとり「自分らしく楽しく」あるための情報収集である。DTA協会は「身体的・認知的・社会的・感情的領域で、一人ひとりの“能力及び適正と限界”をアセスメントすること」とする。

内容は以下のようになっている。1)個人の基本的情報 2)家族やパートナーとの関係、交流の状 3)レジャーや興味 4)文化的・民族的・精神的習慣や個人的趣向 5)終末期。その他に、医療やリハビリテーションの記録も重要な情報となる。よって、セラピストは常にチームケアの構成員として他職種との連携も行う。

2) Planning (調査に基づく計画・設計)

アセスメントで得られた個人のさまざまな情報を基に、レジャー・アクティビティ、各種セラピーなどの計画・設計が行われる。計画・設計に当たっては、「施設全体」「大小のグループ」「利用者とスタッフの1対1」「クライアント(利用者)が一人で行う」など、さまざまなパターンを考える。

3) Implementation (計画に基づく実施)

1対1であれ、グループであれ「飽きさせない、孤独にしない、失敗しない(利用者の自信を失わせない)」ことに配慮しながら、利用者が心地よい刺激を得ることによって、より能動的な感情や行動に結びつけること、適度な競争や人とのかかわりによって社会性や自己コントロールを取り戻すことを支援する。大切なことは、グループでDTを実施していても常に個人への配慮やコミュニケーションを忘れないことである。そのコミュニケーションには、アイコンタクト、タッチ、ボディランゲージなどの表現力も含まれる。

4) Evaluation (事後評価)

プログラムやセッションが一つ終了する毎に、利用者一人ひとりの参加状況(表情・興味深さ・積極性・持続性・身体状況など)を記録し、個人とプログラム全体の分析及び評価を行う。

ソナスセッションの特徴は、表1にある通り利用者一人ひとりに事前調査を行い、設計・計

画し実施に繋げている。そして、利用者の自発的な参加を尊重する。テーマ曲でプログラムの始めと終わりを告げ、利用者が理解しやすいように配慮されている。

さらに利用者の様子を記録に残した後、アセスメントへ戻り利用者への効果を検証している。

6. ソナスセッションの実施先でのインタビュー調査

6.1 目的

DTプログラムの中でソナスセッションは、日本における障害者支援施設並びに老人福祉施設において、日中活動の一つとして展開されているサービス事業に類似している。その中の創作的活動として位置づけられるのではないかと考えられる。そこで、ソナスセッションに焦点を当て、プログラムの実態と有効性について検討する。

6.2 方法

＜調査協力者＞

現在、ソナスセッションを定期的に行っている東京3か所、神奈川1か所の計4か所で介護職員にインタビュー調査を行った。

インタビューに先駆け、各施設責任者の承諾を受けた。インタビュー協力者の人権にも十分に配慮をし、書面にて同意を得た上で情報収集型インタビュー形式の面接を行った。

＜調査協力施設について＞

協力施設	協力者	性別	所在地
介護老人保健施設G	a	男性	K県Y市
	b	女性	
有料老人ホームH	c	女性	T都K区
	d	女性	
有料老人ホームK	e	女性	T都K区
有料老人ホームN	f	女性	T都E区

＜調査期間＞

2010年3月中旬から下旬で施設側の都合の良い日に実施した。

＜手 順＞

ソナスセッション終了後、個別に実施した。所要時間30~45分/人。

6.3 回答内容 (リサーチ・クエッション (以下RQという)) 1~6は個人情報や質問内容として今回の課題に不向きなため内容を割愛する)

RQは以下のとおりである。

RQ1: 氏名

RQ2: あれば前職

RQ3: 資格の有無

RQ4: 就職年数

RQ5: 職場内異動の有無他 (ソナスセッション項目)

RQ6: DTワーカー養成講座の参加有無について

RQ7: ソナスセッションには、いつから参加していますか

a	一昨年(2008年)から
b	8月から12月。昨年卒業(2008年9月 DTワーカー講習会)
c	一昨年夏(2008年)
d	一昨年(2008年)
e	8月14日
f	不明

RQ8: (行っていれば) ソナスセッション以前に行っていたプログラムはありましたか

a	レクリエーションを行っていた
b	レクリエーションや歌程度
c	皆さんと歌を歌ったり、体操をしたりしていた
d	知らない
e	レクリエーションを週1回から月1回程度実施ほかボランティアによる大正琴や踊りの披露など。しかし人手不足の為しだいにレクリエーションは中止にした
f	分からない

RQ9: DTをどの様に知りましたか

a	上司の声掛けで
b	上司から
c	上司の紹介
d	オーナーの紹介
e	芹澤先生が講義して下さい、施設長から講習に行くように要請があった
f	DTの案内が施設長の目に留まり、シンポジウムを聞きにいったのがきっかけ。施設長(オーナー)を通じて知った

RQ10：(RQ8に加え)ソナスセッション以前に行っていた活動はありますか。あれば、その活動に戻ることを考えていますか

a	以前のプログラムには戻れないでしょう
b	レクレーションとソナスセッションは別物。以前行っていた内容に戻ることはない
c	(以前の活動に戻ることを) 考えていない
d	(以前の活動に) もし行っていれば、戻ることはない
e	戻るつもりはない
f	以前はプログラムを行っていなかった。今後もソナス(セッション)を続けていく

RQ11：ソナスセッションを行うにあたり、気を付けていることは何ですか

a	ご利用者間の関係性
b	刺激や変化
c	皆さんが参加して、楽しんで預けているか
d	皆さんが参加できるように気を配ってる
e	居心地よく利用者が参加できるような視点から利用者の席に配慮している。ソナスセッションを実施する部屋も試行錯誤の結果、現在の部屋で行うようにしている
f	なし

RQ12：ソナスセッションの計画内容の企画は上手に行えていますか

a	まだ企画や計画が主だが、思った通りにできている
b	利用者に向けてのソナスセッションになっていると思う
c	(今日の)あの流れでやっていこうと思うが、なにがおこるかわからない
d	(まだ勉強中の為)これからだと思う
e	まだ自分なりの展開は出来ていない。主たるDTワーカー任せの状態
f	自分の思ったように展開できていた

RQ13: ソナスセッションの事前調査はどの様に行うのですか

a	アセスメントを家族や利用者様から話を聴く
b	(本人や家族から) アセスメントを取る
c	先生(芹澤)に頂いてくるアセスメントシートに全部書かせてもらっている。名前を入れて反省会の時にひとりずつ書く形

d	DTアセスメントシートを確認する。名前・生年月日・出生地・最近の出来事など
e	オリジナルのアセスメントシートを用いて、あえてインタビュー的な形をとらず、利用者との普段どおりの自然な会話の中から情報を得る方法を取っている
f	DTのアセスメントシートで利用者さんが好きなこと、生年月日などを記入する

RQ14: 事後評価ではどの様なことを話し合うのですか

a	ご利用者様自身の姿や表情についてどうだったか。利用者様がプログラムに参加出来ていたか
b	反省会みたいな形を実施している
c	伝票を使用して話しあっている(伝票用紙の複写部をほかの職員に渡し情報共有をする)
d	利用者の表情や楽しんでたかということ
e	利用者の席(座る位置)とサポートの必要性のある利用者について検証が主題(改正点の有無)
f	利用者さんがどういう行動をされているか、楽しまれているか、事故のないようにできたか、利用者さんの座席での隣同士の関係性などが合っているかについてどうだったかを話しあっている

RQ15: ソナスセッションやDTを広めたいと思いますか。その理由があれば教えてください

a	はい、広めて行きたい
b	みんなで無い知恵を皆で考えて絞っている
c	DTとしてソナスセッションの一部を広めることは難しい。ある程度時間をかけて(広めて)行くものである
d	(広めていく必要性はあると)思っている。私たちが終わっても意味がない。(施設内では)認知症の人はじーっとしていることが多く、何もすることがない状態が多いので、ソナスセッションで楽しんで頂ける様に考えている
e	施設内での勤務体制となにより職員の向き不向きの問題はあるが、広めていきたいと思う。特に既成(概念)にとらわれていない若い職員に広めたい
f	ソナスセッションやDTを広めていったほうがよい(職員への啓蒙活動は)強引になってはいけない。(ソナスセッションを理解し)仲間をあつめていくことは(現段階では)難しい

6.4 結果

インタビューデータでは、かなり数多くの意見を聞くことが出来た。残念ながらそのデータは今回の報告には情報として必要性が見られなかったため載せることは出来なかったものの今後の調査資料にし

ていきたい。

以下については各RQから出た内容の分析である。

RQ7	DT講習修了者は数年前に終了しておりまだ経験値として短いことが見えた
RQ8	日中プログラムは、専ら歌やレクリエーションを月数回行うことで留まっている
RQ9	上司からの紹介でシンポジウムに参加をした。そこでDTへの関心が始まっていることが伺える
RQ10	以前行っていたプログラムには、戻らない思いが強くあることが見える
RQ8 RQ11	以前施設内で行っていたプログラムと比較すると、以前は利用者へのレクリエーションに歌はあったが、利用者自身への刺激や変化があまりなかったことが受け取れる
RQ12	職員と芹澤による役割分担の中で指導をうけながらの実施状態であることがわかる
RQ13	統一されたアセスメントシートがあることがわかる
RQ14	ソナスセッションは、ご利用者の参加状態について職員が関心を持ち展開していることが伺える。その展開内容を通じそれぞれの施設において必ず振り返りを実施し次回につなげていく方法を職員皆で考えているように伺える
RQ15	ソナスセッションは、職員においても利用者においても必要なものであることが伺える。ソナスセッションを広めていく必要性を感じている職員が多いことも併せて伺える

6.5 考察

これらのアンケートから福祉施設におけるソナスセッションのあり方は、プログラムを理解する者に、大きな期待を感じていることがRQ15から知ることが出来た。その一方、まだソナスセッションを展開することへの経験がまだ不十分である。

RQ9からDTに関しては認知度がまだまだ低いことや上司に言われて参加するといった士気の低さが感じられるが、RQ10から今までの日中活動からの脱却がある。全員今までの日中活動の内容について否定的であることから、今後ソナスセッションの展開幅が大きくなるが見えてくる。

そして、RQ8では、調査協力施設4施設中3施設

がソナスセッション以前何らかの活動を行っていた。調査協力者のうち全員が以前の活動に戻りたくないと答えている。そこから、ソナスセッションの方法とDT養成講座で、RQ13、RQ14で述べられているように、アセスメントシート(表1)(事前調査)から事後評価(振り返り)のプロセス方法を学んでいる。

今後は、集団援助技術として代表的なコノプカ³⁾による集団援助技術(ソーシャル・グループワーク)の手法を始め、ソナスセッションには共通する点があり、その実態についてより具体的に調べ比較検討を行いたい。

RQ13でのDTアセスメントシート(表1)の特徴として、出生地だけを記録するのではなく、生まれた故郷が、都会なのか海辺なのか山間部なのかと言うより具体的な内容を記入する。さらに、家族関係として、フィアンセの死別理由やひ孫の情報までを本人の日常会話から、些細なことも聞き取りもろさず未記入箇所を埋めていく。これらの情報を生かして利用者への細かな配慮がなされていることがわかる。

RQ14においては、ソナスセッションを媒介に職員間の密な連携プレイがあり施設内にあるものだけで準備を行うのではなく、利用者の席の配慮を行うことにより雰囲気ソナスセッションに集中している。この準備にも利用者への心遣いする職員の姿があった。

筆者が見学をしている時に関心を示したことは、声をかけていない利用者が自ら参加してくることであった。その利用者に対して職員が椅子を用意し静かにエスコートしている姿に、場の雰囲気づくりや自ら興味をもって参加してくる利用者への気の使い方などが伺えた。RQ15からもソナスセッションやDTを広めたいと話しをしたことから、利用者自ら参加する姿があるのではないかと感じとれた。

インタビュー項目以外で、協力者に「なぜそこまで日中活動に一生懸命になれるのか」聞いた。何人かの協力者が「利用者への笑顔や喜びを想像して準

³⁾ コノプカ (Konopko, G) 1910～ドイツ生まれのアメリカ在住。定義「ソーシャルグループワークとは社会事業の方法の一つであり、意図的なグループワークを通じて、個人の社会的に機能する力を高め、また、個人・集団・地域社会の諸問題により効果的に対処し得るよう、人々を援助するものである」

備している」という答えがあった。

また、高齢者介護にかかわる者は「生きる意味」や「自己実現」への希求は、どんなに認知症を伴っていても、すべての人間が持っているものであると言う認識と、そのことへの尊敬を共通に持たねばならない。「その気づきのチャンスとなるのがソナスセッションである」と、日本におけるソナスセッションを開発し指導に当たっている芹澤は語っていた。

今回の調査では、職員側の考えのみを取り上げた。今後は、利用者の姿を分析し、利用者にとってソナスセッションの内容をより深化させ客観的にまとめていきたい。

利用者がどのような姿でソナスセッションに参加していたかをさらに分析し、明らかにする必要がある。

7. まとめ

ソナスセッションを行うにあたりハサミで切って活動準備している施設職員らを見かけた。職員らはソナスセッションの展開や構想について語り合い、お互いが利用者の姿をイメージして盛り上がっている様子があった。活動準備にかなりの時間と労力を費やしているが、利用者の方は、そこまで盛り上がるのだろうかという思いで見ている。

介護老人保健施設Gのソナスセッションは次のようであった。開始時間近くになると利用者が個々に集まる。活動内容に先ほど模造紙をハサミで切った紙を散りばめて盛り上がる。この時の利用者の喜び方や笑顔は作られているのではなく、自ら笑い楽しんでいることが感じとれた。

ソナスセッションを通じた職員同士の連携が、利用者との笑談をしたり利用者自身に共感を持つことに繋がっていた。

義本、富岡（2007）によると、「介護福祉士ではバーンアウトの『脱人格化』に影響する要因として、『上司・同僚とのコンフリクト』が、また、『情緒的消耗感』では『利用者とのコンフリクト』が抽出されている」としている。今日介護職員のバーンアウトによる離職問題は多い。このように介護現場では、意思疎通が上手くいかないことが問題となっている。今回調査した施設では、作業を通じてお互いの共通理解が十分に図れていた。

このことが、チームでの問題解決をスムーズにし、個々の職員を技術的・精神的にサポートし、より質の良いサービス提供に繋がる。

今回、筆者は観察者として参加し、利用者、職員共に目をいきいきさせて取り組む姿をみた。計画から実施までの緻密な準備の結果、職員も利用者も楽しめる活動となっていた。緻密さとしては、参加利用者の席割を行い利用者同士の不快やトラブルを排除することはプログラムに大切なこととして調整を行っていた。プログラム中、参加してこない利用者への介護やかかわりも、ほかの介護職員と連携して行っていた。

職員同士の情報交換、共通理解がかかせないソナスセッションを行うことで、職員同士の連携する力が高まったように感じられた。

今後の課題として、ソナスセッションを取り入れていない福祉施設との比較検討を行うことで、より詳しく職員間で連携する利点と利用者にとっての利点について、比較検討する必要がある。

8. 倫理的配慮

本研究に協力いただいた全調査協力者に対しては、事前に本研究の目的・方法・調査内容からの離脱の意思決定権が調査協力者にあることなどを口頭と書面で説明したうえで協力を依頼し、書面への署名をもって同意を得た。またデータ管理には細心の注意を払い、処理する際には匿名化した。

謝辞

この研究調査にあたっては、日本ダイバーショナルセラピー協会会長芹澤隆子さん、調査協力者・施設の方々に感謝の意を表します。そして岩本ゼミの学生の協力にも感謝する。

引用文献

- 1) 渡辺 嘉久, 芹澤隆子共著・監修 (2004) 「全人ケアの実践」 朱鷺書房
- 2) 月刊総合ケア vol.13 No.8 (2003) 「老いることは楽しむことの高齢者ケア ダイバーショナルセラピーとは」 地域リハビリテーション2(12),(21)1047~1049.2007.
- 3) 芹澤隆子著「ダイバーショナルセラピーのエッセンス」
- 4) コノブカ,G著・前田ケイ訳 (1967) 「ソーシャル・グループワーク」 全国社会福祉協議会

- 5) 義本純子, 吉岡和久共著. 「介護老人福祉施設における職員のバーンアウト傾向とストレス要因の関係について」北陸学院短期大学紀要39,161-173,2007-04-20
- 3) 芹澤隆子著「実践してみよう!ダイバーショナルセラピー」コミュニティケア10(1),(109)50-67.2008/1
- 4) 新野三四子著「キリスト教社会福祉教育とダイバーショナルセラピー教育の接点」大手門学院大学社会学部紀要,第3号,121 - 128.2009.6)

参考文献

- 1) 古川,白澤,川村編 (2002)「社会福祉士・介護福祉士のための用語集[第2版]」誠信書房
- 2) 野崎和義監修 (2009)「ミネルヴァ社会福祉六法 2009[平成21年版]」ミネルヴァ書房
- 5) 有限会社ウェル・プラネット HP より
http://www.welplanet.co.jp/p_therapy.html

資料 1

ダイバーショナルセラピーに基づく

「SONASセッション」について

SONASセッションとは、音楽と会話をベースに回想、運動、遊び、五感への刺激、笑いなどの要素を、設定したテーマにそって40分程度のセッションに組み込み、一人ひとりに焦点を当てながらコミュニケーションし、クライアントの楽しさ、心身の活性、能動的感情や行動、自己表現などを取り戻そうとするDTプログラムの一つです。

オーストラリアのダイバーショナルセラピストたちは、クライアントが生きるモチベーションや Happy な気持ちを取り戻せるように、多様なプログラムを工夫し、開発しています。「SONAS(ソナス)セッション」もそのようなDTプログラムの一つとして広められてきたアクティビティです。その提唱、実践者でもあるクイーンズランド州の Vickie Kimlin(DTAQ 会長)によると、「SONAS」という言葉はアイルランド語で「幸せ」「楽しい」「満足」「Well-being/生き生きとした幸福感」などを意味し、シスターの Mary Threadgold さんによって考案されたといわれています。このセッションでは「音楽と会話」をベースに、一つのテーマに沿ったストーリー性の中に、五感への刺激や回想、笑い、コミュニケーションといった要素を組み込んでいきます。

対象は虚弱高齢者、認知症、障害を伴う人々。病院や施設、デイサービス、緩和ケアなどの場面などで実施されます。セッションでは、できるだけ同じくらいの認知レベルや病状の10人程度のグループを設定しますが、決して強制するのではなく、自発的な参加を尊重します。そのため掲示板でお知らせしたり、「始まり」や「エンディング」のテーマ曲も毎回同じ曲にします。その音楽が聞こえると、三々五々クライアントさんたちが集まってくるといった感じです。また、SONASが効果的と思われる人には積極的に声をかけて誘います。SONASの最も重要な目的はコミュニケーションとポジティブアプローチ。終了後は、その場で必ず参加スタッフでミーティングをもち、参加者一人ひとりの様子を記録に残します(これがアセスメントや可能性の発見につながります)。プログラム全体の見直しや分析も欠かせません。

セッションの長さは参加者の体調や集中力の限界などを考慮して設定しますが、30～40分くらいが一般的です。折々の生活観や季節感のあるテーマを選び、生活の中の道具や習慣、懐かしい話題から光や色による刺激まで、きれい!美味しい!心地いい!うれしい!といった感覚や感情を呼び覚ませるものなら、何でもSONASの材料になります。四季折々の自然や行事、お祭りなどの豊富な日本はSONASの宝庫といえるでしょう。

日本ダイバーショナルセラピー協会
芹澤隆子

